書評

# ジュリアン・ジャクスン（向井喜典、岩村等、振津純雄訳）『フランス人民戦線史―民主主義の擁護一九三四～三八年―』

渡辺和行

## 一

一九九一年度の歴史学界を回顧した『史学雑誌』の「ヨーロッパ（現代―フランス）」部門を担当した田中正人氏は、「訳書の多いことに」驚きを表明すると同時に、戦間期の業績については経済史の領域以外にはほとんどなかったことを指摘している。[1] たしかに近年の歴史学ジャンルの翻訳事情は、中世から近代初期のヨーロッパ社会史の翻訳があいつぐという特徴を持っていたし、わが国の一九三〇年代フランスの研究も低調であったことは否めない。このような文脈に本書を置いて考え合わせると、本書の意義がいっそうきわだつ。なぜなら本書は、第一にフランス人民戦線というフランス現代史上の政治的「大事件」を扱った書物の翻訳であり、第二にわが国ではここ数年、現在の研究水準に立った人民戦線のモノグラフが書かれていないという事情があるからである。バランスのとれた人民戦線史を叙述した平瀬徹也氏の『フランス人民戦線』（近藤出版社）は、一九七四年の出版であった。爾来一八年、そろそろ一八年間の

成果を踏まえた人民戦線史が書かれてもよい頃である。本書の翻訳刊行が、わが国の研究事情のなかでは意義のあることが了解できるであろう。以上の一般的意義を確認したうえで、本書の書評に移ろう。

## 二

すでに廣田功氏がパリとストラスブールで開かれた人民戦線の五〇周年記念集会の基調を報告したように[2]、人民戦線研究は、政治史・外交史・経済史中心の研究からこれらの領域を含みこんだ日常生活史や社会史の研究へと変貌を遂げつつある。マドレーヌ・ルベリューによる人民戦線の研究動向の紹介の仕方にも、視座の変化は表れている。その紹介は、「イメージ」・「余暇」・「シンボル」といった新しいテーマから始まり、「地方」・「知識人」・「キリスト教徒」と続き、「スペイン」・「政治」が最後に置かれるという構成をとっていた[3]。英国人の歴史家ジャクスンの研究歴も、このような人民戦線の研究史を反映している。著者は一九三〇年代フランスの経済政策の研究から出発し、近年は人民戦線の文化政策に関心を移しているようである[4]。したがって一九八八年に出版された原著は、彼の研究歴に裏打ちされた内容の濃い書物となった。それは、本文のみで二段組で三三九ページという本書の分量にも示されている。われわれは、人民戦線をトータルに描く歴史書がイギリスに欠けていた状態を埋めようという著書の意気込み（序言）をそこに感ずることができる。

著者の基本的立場は、人民戦線が初めから「消極的な連合」（五三ページ）であり、国際情勢の重圧によって解体したというものである（三一九ページ）。そのうえで著者は、人民戦線を三つの性格を持った現象として把握する。第一に大衆運動としての側面、第二に政党連合としての側面、第三に権力を行使した政府としての側面である。この立場は、本書の構成にも表れている。本書は五部からなっており、その目次は以下のようである。

序章　人民戦線—経過の説明

第一部　政権への道

第一章　人民戦線の起源

第二章　指導者

第二部　爆発

第三章　社会的爆発

第四章　文化的爆発

第三部　権力の行使—平和とパンと自由

第五章　「自由」—民主主義の擁護

第六章　「パン」―ブルムのニューディール
第七章　「平和」―矛盾
第四部　連合と対抗
第八章　統一の神話
第九章　右翼の見解
第五部　人民戦線の終焉
第十章　検視
終章　人民戦線の歴史的位置

## 三

本書の第一の特色は、年代記的構成をとって通史としての性格を持ちつつも、テーマ別の構成を合わせ持たせて人民戦線の歴史的論争に論究していることである。この点を本書にそって見てみよう。第一部は、人民戦線の形成過程を政治史的に扱いつつ、そこでは共産党の戦術転換の理由や共産党の入閣拒否の理由が検討される。著者は、ソ連外交とコミンテルン内部の議論にフランス共産党の運動方針や党内事情とを有機的に結びつけて考察を進めている。彼は、一九三四年六月の共産党の戦術転換をモスクワ起源説によりつつも、フランスの国内政治・コミンテルン内部の議論・ソ連外交の新方向との「三重の相互作用の結果」（四一ページ）と見る立場を提示した。入閣拒否も同様の図式で説明される。また第二章では、人民戦線に集まった政党と労組の四人の指導者（レオン・ブルム、モーリス・トレーズ、エドワール・ダラディエ、レオン・ジュオー）が伝記的に描かれる。注意すべきことは、これら四人の指導者像が個人を越えて、社会主義・共産主義・急進主義・サンディカリスムというフランス左翼の重要な政治文化の説明になっている点である。

第二部は、大衆運動としての人民戦線が叙述され、民衆のマンタリテにまで踏みこんだ分析がなされる。第三章のテーマは、一九三六年のストライキの起源とその意味である。さらに三六年の獲得物をめぐる攻防が、労働運動史として三八年まで追跡される。ストライキの起源については、ジャクスンは陰謀説を否定し、自然発生説によりつつも産業部門によってはストライキの初期段階で組合活動家の意識的介入を認める立場に立っている。ストライキの意味については、著者はストライキを革命と捉えるのではなくて、工場規律の恐怖から解放された労働者が連帯感を高揚させて作り出した祝祭と考えている。第四章では、人民戦線の文化政策が立体的に描かれる。つまり「芸術と政治と余暇との相互関係」（一二九ページ）がテーマであり、共和主義的文化活動の多様な形態や余暇の組織化が明らかにされ

た。そこで志向されたものは、文化・芸術・スポーツ・旅行・映画の民衆への普及であり、「現存の伝統的文化の民主化」（一四三ページ）であった。つまり「障壁を破壊せよ」というスローガンにあるように、「民衆と文化との間の障壁、文化表現のさまざまな形式の間の、観客と出演者との間の、創作者と文化の消費者との間の、過去と現代との間の、科学と芸術との間の障壁」（一四八ページ）の打破である。もちろん著者は、文化の発信者と受信者の双方についての吟味を忘れていない。さらに「有給休暇」が実際にどのように利用されたのかをフォローし、「休暇が一夜にしてフランス労働者階級の生活の特徴となることはなかった」（一五五ページ）点に注意を喚起している。

第三部で、政府としての人民戦線の諸政策が、「パンと平和と自由」という人民戦線のスローガンにしたがって述べられる。人民戦線の植民地政策の目的、週四〇時間労働制の実施がフランス経済に与えた影響、スペイン内戦に対する不干渉政策の理由などのテーマが探求される。第五章で、明確な植民地政策をもたなかった人民戦線は、植民地に「自由」をもたらさなかったことが明らかにされた。購買力政策・平価切下げ・プラニスムなどの経済・財政政策を論じた第六章は、ジャクスンの自家薬籠中のテーマであり論旨も明快である。第七章で外交が論じられ、「平和」を掲げた人民戦線が「戦争」に備えなければならないジレンマが描かれる。スペイン問題については、フランス国内の政治情勢を重視する著者の見解は妥当であり、英米仏三国通貨協定をめぐる交渉が政府の対スペイン政策の手足を縛ったという指摘は重要である。(5)

第四部は、一九三六年から三八年にかけての政党連合としての人民戦線が崩壊にいたる過程の力学と、右翼勢力の対応に焦点が当てられている。第八章で、個人主義的政治文化を持つフランス人が、人民戦線期には自発的に組織に加入し団体を結成する政治行動を示すにいたったが、人民戦線を構成する諸組織の組織内対立や組織間対立によって人民戦線が解体していくさまが分析される。第九章で、保守党や右翼リーグと宗教界と産業界の対応が検討され、右翼勢力の不統一が明らかにされた。

第五部は結論部であり、人民戦線の成果と人民戦線がフランス社会と歴史に与えた衝撃について総括される。ブルムの辞任の理由がテーマである。著者はこれまで論じられた諸理由に加えて、辞任によって連合としての人民戦線の団結を保持した点を強調する。以上の紹介からも分かるように、時系列的構成とテーマ別的構成とが縦糸と横糸としてうまく織り合わされている。

本書の第二の特色は、これまで比較的触れられなかったテーマにも光をあてていることである。第二章のダラディエ論は、

わが国でも研究されていないテーマである。第四章の「文化的爆発」は、割かれているページ数からしても著者がもっとも力を入れたところであろう。そこでは、文化からスポーツや旅行や映画にいたるレクリエーションの提供とその実態が描かれている。しかも単に実態を描くだけでなく、「旅行は娯楽であるだけでなく、フランスとフランス史の発見であった」（一五四ページ）とか、ルノワールの映画『ラ・マルセイエーズ』のテーマが「国民的和解の賞賛」（一六二ページ）であると指摘しているように、共和主義的な文化統合が意図されていたことも看過していない。しかし人民戦線による余暇や文化の提供が、「すぐれて政治的な運動であった人民戦線」の「非政治化の過程に寄与した」（一五六ページ）という逆説も著者は忘れていない。また第五章の海外植民地問題や第九章の共産党による「手をさしのべる」政策へのカトリック勢力の対応や、「経営者の復讐」[6]は注目に値する。この第九章によって、左右両翼を含んだ人民戦線期のフランス社会が全体として明らかになったからである。

本書の第三の特色は、人民戦線の歴史的論争を巧みに整理紹介していることだ。それぞれの論争について、斬新な見解や独自の創見があるわけではないが、論争点の手際よい整理とそれへのコメントは有益であり、初心者にも分かりやすい。

本書の第四の特色は、社会史的手法の適用である。第二部やシンボルに言及した第八章が好例である。一九三六年六月の工場占拠ストライキのなかで模擬裁判や模擬葬儀が行われ、職工長の人形を梁につるしたり火あぶりにしたり、また人気のない坑内係員を行列の先頭に立つよう強制したりと、シャリバリやモラル・エコノミーといった民衆文化の蘇生をそこに読みとることができる。また一九三六年七月一四日のデモには、フランス革命時代の衣裳を着て、大革命の事件を描いた山車を作って練り歩いた人々が多くいたことは、連盟祭などの「革命祭典」を想起させる。つまり民衆運動と祭りの結合である。本書は、現代史にも社会史的アプローチが可能であり、かつ必要であることを示した。

本書の第五の特色は、現在的関心から著者が執筆していることである。一九六八年と一九三六年、一九八一年と一九三六年とが比較されたり、人民戦線期の文化政策が文化の大衆消費時代の幕開けであったことが指摘されている。また現代まで人民戦線が政治的にどのように論じられ扱われてきたのか、かつ人民戦線の時代を生きた人々によってどのように記憶されてきたのかをも明らかにしている。本書を読むと、労使関係や工場規律、時短や余暇、芸術や文化など、今日のわれわれのライフスタイルを創り出した原点が戦間期の社会であることが分かる。すなわち、今日求められている「非人間的労働の人間化」が開

始されたのがこの時代であった。「ブルムの実験」が、現代社会とダイレクトにつながっていることが了解できるであろう。

本書の第六の特色は、目配りの効いたバランスのある叙述をしていることである。人民戦線形成期の急進党の対応や、トロツキストや左翼急進主義者への言及がそうである。またパリだけでなく地方の動きについての言及も多い。一九三四年二月一二日の地方の状況や反ファシズム知識人監視委員会の地方組織、一九三六年六月の地方のストライキなどがその例である。

本書の第七の特色は、その総合的見地である。注に明らかなように先行する研究が十二分に消化吸収され、現時点での研究の総合が目指されている。著者自身、「本書を……これまでに欠けていた総合的な考察を提供しようと意図して世に問う」（序言）と述べているが、本書はそれに成功している。

些事に属する著者の誤記であるが、コミンテルン西欧局のリーダーは、ミュンツェンブルクではなくてミュンツェンベルクであるし、『ヴァンドルディ』の編集者は、ジュール・ゲーノではなくてジャン・ゲーノであり、人権同盟の創立は、一八九六年ではなくて一八九八年である。

## 四

これまでわが国の読者は、反ファシズムと反恐慌闘争としての人民戦線しか知らなかったと言ってよい。本書は、反ファシズムと反恐慌という二つの闘いについての均衡と抑制のとれた叙述に加えて、文化闘争ないし文化革命としての人民戦線をも読者に教えた。[7] 社会史や日常生活史の影響のもと、この分野での国際的比較もすでに始まっている。[8] 人民戦線の文化政策研究の決定版となる可能性が高いパスカル・オリーの研究がいまだ出版されていない現状では、本書は、文化闘争としての人民戦線研究としても出発点となる文献であろう。ファシズムと恐慌と文化の三領域の闘争として人民戦線を描いた本書によって、読者はフランス人民戦線の最良のガイドを得たのである。

このように今日の人民戦線研究の成果が散りばめられた本書であるが、その訳文はやや生硬であるうえに、誤訳、訳者の間での訳語の不統一、さらに一字から三行にわたる原文の脱落が目についたのが非常に惜しまれる。このため本書評の引用訳文も一部拙訳である。本書が好著であるだけに残念である。[9]

（1）『史学雑誌』第一〇一編第五号、一九九二年、三五四―三五八

ページ。

（2）廣田功「フランス人民戦線期の「日常生活」―五〇周年記念集会をめぐって―」『社会経済史学』第五四巻六号、一九八九年。ストラスブール集会に提出された論文については、『社会運動』誌に掲載された「有給休暇」特集によってその全容を知ることができる。*Mouvement Social*, no. 150, 1990.

（3）Madeleine Rebérioux, Le cinquantenaire du Front populaire, *Mouvement Social*, no. 143, 1988, pp. 115-130.

（4）Julian Jackson, *The Politics of Depression in France 1932-1936* (Cambridge, 1985); Jackson, Le temps des loisirs: Popular Tourism and Mass Leisure in the Vision of the Front populaire, in M. S. Alexander and H. Graham eds., *The French and Spanish Popular Fronts* (Cambridge, 1989).

（5）この点は、評者も不干渉政策の経済的理由として数年前から考えている論点である。不干渉政策については、渡辺和行「不干渉政策の決定過程」、同「不干渉とフランス世論一九三六」『香川法学』第三巻第一・二号、第四巻第一・二号、一九八三―四年。

（6）「経営者の復讐」とは本書第九章の小見出しであるが、コルボームの著作を意識したネイミングである。Ingo Kolboom, *La revanche des patrons: Le patronat face au Front populaire* (Paris, 1986).

（7）邦語文献では、すでに廣田功「フランス人民戦線の〈文化革命〉の一側面」中央大学人文科学研究所編『希望と幻滅の斬跡』（中央大学出版部、一九八七年）がある。

（8）Gray Cross, Vacations for All: The Leisure Question in the Era of the Popular Front, *Journal of Contemporary History*, vol. 24, 1989. クロス論文は、英仏の余暇を論じている。なおイタリアの余暇の組織化については、デ・グラッツィア、豊下楢彦その他訳『柔らかいファシズム』（有斐閣、一九八九年）があるし、ナチス期の日常生活史や「下からの社会史」の手法による文献が数多く出版されていることは周知の事実である。

（9）書評脱稿後に側聞するところでは、本訳書の新版が用意されているとのことである。昭和堂編集部の英断と良心に敬意を表したい。（昭和堂、一九九二年七月刊行、A5、三八九ページ、四、八〇〇円）

一九九二年九月脱稿。